

お留守さま

泉鏡花作

一

今戸邊いまとあたりで出来るできのだといつて、友達ともだちがくれた姉あねさんの人形にんぎやうが一個ひとつ、小形こがたの、細長いほそなが桐きりの箱はこに入はいつて居あるのを、はじめは墨すみかと思おもつた。學生がくせい、生駒いこま讚平さんぺい。  
「小石川柳町こいしかはやなぎぢやうの、玄關げんくわんとも二間ふたまといふ長屋ながやの侘住わびすま居ひ、南向みなみむきの庭にはを前まへに、縁側えんがはに向むけて据すゑた昔むかしの寺小てらこ屋やもので、引出ひきだしが三個みつづゝ兩方りやうほうについた机つくえの上うへに、其その人形にんぎやうを。

唯とほ頼杖ゝじゑをついて、傍かたはらなる大湯呑おほゆのみに煎茶せんぢやを入いれたのかたてに片手かたてをかけながらつく／＼……見るみから媚なまめかしい、衣服きものは薄うすお納戸なんどの彩色さいしき、帯おびの處ところを墨すみで染そめて、しめたといふより、巻まきつけたやうな引ひかけ結むすび。弱腰よわこしは、消きえて見みえないほど、すらりと裳もそにから擲ちんで、片足かたあしを眞直まっすぐに、衣服きものの上うへから透すいて見みえるやうに、線せんを柔やわらかに描ゑがいて、左ひだりの脚あしを折曲をりまげて、其その伸のした右みぎの太ふくら脛はきの處ところで相違くみちがへた、稍々やゝゝじだらく

な後姿うしろすがた。はらばひの人形にんぎやうで、根上りねあがりの品ひんの可いい圓鬚まるまげ、生際はえぎはのばかし手際てぎはよく、鼻筋はなすぢがあ通とほつて黒目勝くろめがち、優やさしい眉まゆ、これに兩手りやうてを頬杖ほづえした、其その手ての肱ひぢのあたりから、下しもぶくれの、うつとりした顔かほへかけて、胡こ粉んの色いろの白々しろくとある美うつくしさ。但たゞし唇くちびるを紅べにで描かかず、墨すみでしたゝめたのが、何なんとなく曇くもりを帯おびて、愁うれひを含ふくみ、歌麿うたまろの艶えんな處ところへ、北齊ほくさいの凄味すこみを帯おびた、凡およそ二寸すんばかりの、所謂いはれのあるらしい、何なんとなく深ふかい秘密ひみつな意味いみのありさうなのが、土つちで拵こさへたものだけに、水みづの垂たるといふ艶つやはないが、恰あたかも柳やなぎの蔭かげで白魚しらつをを見るみが如ごとき婦人ふじんである。

此この手ての前まへに、同おなじ一ひと、其その箱はこの中なかに一ひとつ冊さつ、櫻さくらの花はな片位らくらゐな、小ちひさな本ほんが供そなへてあるが、なり形かたち、顔かほの氣きく組みから推おして試みれば、經典きやうてん、詩歌しいかの書しよではあるまい。

出來できは新あたらしいのであるけれども、見みる處ところ、髮かみの結ゆひやう、衣なりのつくり、當いまどき時ときの妻妾さいせふの風俗ふうぞくではない、古ふるくからある形かたちを、あらためて作つくつたものらしいのである。

「讚平は右膽左膽ながら、不圖桐の箱の蓋の裏に、色紙形の紅唐紙をはつて、

おるすさん

と記してあるのに心付いた。然矣、何者か、良人の留守を意匠として直ちに婦人の名としたものゝやうに思はれた。

「讚平は、思はず湯呑を推遣つた手で、膝を打つて、打微笑み、

「乳母や、をかしいぢや無いか、一寸御覽。」  
其の姉さんを掌にのせて、背後を振向いて言ふ。

「爰に針箱を据ゑて縫物――寧ろ繼物をして居るのは、此の孤兒のために一身を捧げて十七の年紀から守育て、今、一室に水入らず、乳母のお松といふのである。」

「何うだ、よく出来て居るぢやあないか。」

乳母は針の手を留めて、少し顔を出すやうにして、

「まあ、上手に拵へましたねえ讚様、お薬師様の縁日ですか。」

「可哀相に、お前見たつて違ふよ。縁日ものにこ

んなのがあつて堪りますか、御覽能く。」

「成るほど、綺麗だよ。私は又昨夜買つておいで

なすつたかと思つて。」

「昨夜買つて来たものを今更感心することがある

もんか。」

「でも坊ちゃんだと言はれるのが口惜くつて隠し

ておいでなすつたのかと思ひましたの。」

「何ういたして、坊ちゃんのおもちやにしては、こりや色氣があり過ぎら。杉山が朝ツから飛込んで、何だか仰々しく、歸つてから出して見る、感心するツて置いて行つたんだが、お前にや然う見えないか、何處かこりや、あの、深川の姉さんに肖てるやうだ。」

「御新造さん。」

「むゝ。」

「拝見。」  
「といつて請取つて、眩いばかり障子越に秋の日の射し入るのを、片手、人形の上に翳して掌を少し影にしてためつすがめつ。」

「本當ですなえ。」

「讚平は頷いて、」

「何うだ、そつくりだらう。」

「肖て居りますこと、まあ。」  
「と上へ上げて又

見直す。

「まだ驚くことがあるんだ、此の人形の名をお留

守さんとつけてある。」

「へい、おるす……何でございますか、名  
なんでございますか。」

「あゝ、名さ。」

「妙なお名前でございますね。」

「いゝえ。」とおさへて、讚平はまた微笑み  
ながら、

「洒落なんだよ、そら其の旦那か、御亭主か、お  
かみさんが留守をして居る處さ。」

「なるほど解りました。」と乳母合點をする。

「今つからお前然う早く感心をしちまつちやあ不  
可い、まだこれからなんです。」

「ねえ深川のにそツくりだらう、處が彼の人のこ  
とを皆がおるすさんと恚う申します。」

「御新道さんでございますか。」

「うむお婦美さんのこツた、お貸し。」といつ  
て、讚平は乳母の手から人形を請取つて舊の机の上  
に置き、座を斜に彼方此方お松の顔と、お留守の顔。

「即ち、取も直さずだ、取も直さん此の人のこと  
さ。」

「何故然ういふことを申しませう。」<sup>一入へいり</sup>

「其がね、死んで居ないものを、彼の人は御亭主が留守のつもりで居る。」

「御亭主だなんてをかしうございます、あなたの従兄さまぢやありませんか。」

「僕の従兄だつて多之助はお前、お婦美にやあ亭主だらう。」

お婦美は感心にや感心だがね、多之助が死んで居ないなんと謂はうものなら、顔色をかへて腹を立つよ。

僕が行つたからつて、突然顔を見ると、

（姉さん今日は、従兄さんは、）とお極りなんだ。然うするとね、お婦美が、

（あの今留守なの、）と何時でいもいふことになつてるがね、極か悪いか、氣の毒さうに莞爾するよ、

可哀相だな、乳母。」

「はい、」

「おゝ、不可い、お前年紀を取つたか、此頃は、すぐ泣くね、厭だぜ、僕は。」

「其でも御新造様の話が出ますと、御親類中、何

誰もほろりとなさらないものはございません。否、  
お婦美様のことばかりぢやあないのでございます、  
一所に若旦那様のこともおもひだ  
す、あの、其でお留守さんといひますのでございま  
すかい。」

「女中にも然うだツさ、だから皆で、」

「誰がそんなことを申します。」

「先づ僕、」と讚平は低聲なり。

「お人の悪い！ あなたは！」



「蔭口といつちやあ濟まないけれども、何それ位なことは本人も心得てます、だつて、お前泣いてばかり居られやしないや。」

「そんなら可うございますけれども、また其れにしました處で、面と向つて怪我にもお留守さんなんておつしやつては不可ませんよ、本當にお可哀相だと思つてお上げなさいまし、此の間も蠣殻町の大胆な様に、あなたのことを大層お譽めなさいましたつて、而して釦の光る學校の服を召して、胡坐して、姉さんツて言つて下さる、最う何も思ひませんとさ。御新造さんも未だ三十には間がおあんなさるし、貴方もお若うございますから本當ならば一寸々別荘の方へ被行つしやいますのは宜くございませんと申しますのですが、あゝやつて二十の年紀から佛様に操を立通して在らつしやる、御新造様のお心を察しますれば、そんなに懐しがつておいでなさいます貴方を、何も世間體を分隔をつけますでもございません。まあ却つて御不便に思つてお上げなさいましと、お勧め申します位でございますが、しかし讚様、」

と少し更まつていふ。

「何だ。」

「當家の親御様が世に被入つしやいますれば、屹とお留めなさいますよ。其は實のお兒さまでございまずと却つて思過しをなすつて、不安心に思召しませう。私には御主人でございませう、家來が見ましてお主を確だと思つたのに間違はございませぬ、其は最うお婦美さまとお床を並いべてお寝みなさいませう、乳母やは安心をして居ります、自慢のお兒様なんでございますむの、私は不容量でも本當に鼻が高いのでございませうよ。」

「だから精出して勉強をなさいだらう、大分評判が可い。」

「ほゝゝ、あんなことを。もう其に越したことはないの。」

「處が實一寸出懸けたいのです。」

「おや、どちらへか。」

「お言葉に甘えるやうで濟まないけれども。」

「深川へ行らつしやるの。」

「お留守め、此の間も僕にぜんまい仕かけの膾臍の玩弄品をやらうかつていつた。おまけにお前、靴を肩からぶら下げろの、半洋袴にして長い靴足袋を穿くと似合ふのと、人を小兒にして居ら、丁ど可いから此の人形を持つて行つて一番驚かしてくれようと思ふ。」

「其は行らつしやいますのは可うございますけれども、あの餘りおいでなさりません方が可うございます。」

「何だか譯が解らないね。」

「否、別荘の方へはいろんな藝人などが出入をしますさうですから、また。」

「なあに、お婦美がもう飽いたと見えて俳優や義太夫語なんざ此頃ぢやあまるで来ない、内中ひっそりして奥の方で長唄のやうな謠を遣つてます、  
「といひながら早や人形を懐中へ、つい手の届く床の間の隅にある蝦蟆口と巻煙草を一所に掴んで、無造作に袂の中、不斷着を其のまゝ飛白の書生羽織の紐を結び直すのを見て、

「洋服ですとお喜びなさいますよ。」

讚平は打笑ひ、

「然う旨くゆくもんですか。」

「そんなことをおつしやつて、貴方また憎まれ口をお利きなさいますなよ。」

「そりや、さきへ行つた上で、御馳走のあり無し

に因るさ。」

四

「御馳走、解りましたよ、入らつしやり早々、晩のお菜の御穿鑿なんかなさるもんぢやありませんわ。婦人の顔を見たら髪の出來ぐらゐお賞め遊ばすもんですよ。」と中の間の口でいふ小間使の初は、島田に美しく結つて居たが、自ら讚せる如く出來たてのやうで、衣服も餘所行の派手な絲織。日向を通つて些と暑かつたといふ風、衣紋が亂れて圓顔の逆氣鹽梅、つい今出先から歸つたらしい。讚平が汐入町の別荘の木戸に入る時、宿車が三臺、洲濱形に梶棒を置いて、一人金時の文身であらう、脇腹の邊ほのかに鉞の柄の見える胸の汗を拭うて居た。

「何だ、髪の出來、よせ、椎茸なら汁のだし位にやあなるけれども、汝の島田なんかおかめの雑物とおなじことだ。」

「あら覺えて在らつしやい！」  
 「何といふ大きな聲です。」と此の時銀杏返の年増が次の室からひよつくり出たが、何故か眉を顰めて居た。

「お仲お前も一所か、」

「おや入らつしやいまし。」

「何處へ行つた。」

「はい、」と二人が前後もなく、殆ど同時に言

はうとするのを、讚平遮つて莞爾して、

「待て當てゝ見せよう。」

「當てゝ御覽なさい。」と甲走つたり、そはつ

いたり、叱られたり、悄げたりしたお初は絲織を大事さうに膝を浮して坐る。

「いきなり口へ浮んだのが干瓢ね、初の天窓が島

田湯婆と。」

「お仲さんあんなことをおつしやるんだものを、」

と仲働の顔を見て怨めしさう。

「黙つて聞かないか、ものには前兆といふのがあ

る。こゝで考へるに築地へお墓参だらう。」

「當りました！」といひながらお仲が束と出て、

斜に半身を土間に乗出すと、開閉の荒ッばい、腕白  
がよくは閉めないで入つた戸口から、顔を出して繻  
子の帯の引掛結びの背を擦り、

「長吉さん、」

「おゝ、」と大聲を引張つて、返事をしたのは件の文身の兄哥なり。

「お茶をお飲んなさいな、壯俊さん、御苦勞様。」

「へい、難有う存じます、」といふのが聞える。

「さあ、奥へおいでなさいまし、讚様、臺所の方を氣に遊ばすものぢやありませんわ、何うせ湯婆でございます、ほゝほ。」

「生意氣なことをいふな、どれ、お婦美の奴を口説いてやらう、何方だ、庭の方か、池の方か。」

「お仲さん、御新造様は。」

「あゝ池の方のお座敷ですがね。」と又忙しさ

うに取つて返し、歩き／＼、

「讚様、讚様、讚様、」といひ／＼以前の次の

室に入つて、

「一寸々々何うぞ、」とものありげに低聲で呼んだ。

「うむ、」

立話でお仲はひそめき、

「貴方、よく入らつしやいましたのね、本當に可

い處、實は其のお墓參に參つたんですが。まあ行らつしたんです。」

「感心。」

「はじめの内は、歸途に新富座を見せようよ、なんて仰有つて大層御機嫌が良かったんですが、向うへ参りますと、お側まではお連れなさいませんが、お一人でお墓へお参りなさいましたつけ、卵塔場を出ておいで遊ばしたお顔を見ますと、私もは何うなさいましたと、駈出して参りましたわ、生駒さん、御新造様は宛然ねえ、去年瘡をお煩ひの時のやうなお色なんです。」

吃驚して、お初どんと兩方からお顔を見て居りますと、心持が悪い、歸る、とおつしやつて、丁ど梅吉の姿も見えましたから、直に。母衣をおるせとおつしやつたツ切、今しがた、まあ、無事にお歸りなさいました、御帯をお解きなされると、其儘あなたね、枕を寄越せつて、横におんななさるぢやありませんか。

お初どんは少いから、そんなぢやおあんなさらないと暢氣でせう、私は心配でなりませんから、お醫



者様を呼びますやうに申しましたけれども、病氣ではない、とおつしやるんでせう。其でもと押返していひましたら、煩い！ とね、散々な御機嫌です。何うしようかと、うる／＼して居りますのに、お初どんが暢氣らしい、わあ／＼いふのが又逆らつちや悪いと思つて、參つて見ましたら、あなたが在らつしやつたんですよ。

眞個に助かりますわ、何うぞ一番様子を見て下さいますな、可い工合にねえ、後生なんです。」

讚平は頷いて聞きつゝ、少時考へたが、

「何か我儘だらう、其とも、お前たちが謀計に乗つて新富座をごまかされたんぢやあないか。」

「御串戯ばかり、何うぞ。」

「可し、池の方だな、」と立つてた二人は二ツに分れて、生駒はつか／＼と行き懸けたが、振向いて調子高く、

「お茶葉子を早く、あの又最中を紙に乗せて出すと、撲るよ。」

「呀、なるほど御不例のやうだ、」と生駒は奥座敷の入口で聲高に言った。

勝色うら都内の小搔卷の襟を深く引懸けて、お仲は横になつて居るといつたけれども、しかし枕を其の搔卷の裾の處に轉がして、六疊の片隅に差置いた小机に恁懸つて、根上りに結つた年紀には肖ない内端な鬘、其さへ重たげに、眉の隠るゝばかり俯向いて手で支へ、壁に對して念ずるが如く、煩へるが如く、惱めるが如き風情なるがお婦美である。

見るから最も惱ましげな姿であるのに、生駒は遠慮些とも無く、つか／＼と座に通つて、汐入の池に臨んで欄干のついた板縁に腰を懸けて、斜めに見るお婦美の後姿は、艶かに冷たさうに、鬢の毛の透いて映るばかり、眞白な耳朶から頬のあたり、額をさし入れて二枚合の衣紋、やゝ寛かに、解棄てたまゝの錦の帯は、紫紺の地に處々白金黄金の光さして、搔卷の裾にかくれ、疊の上にあらはれて、恰も恁る麗姫の棲める仙境の細道に異ならず。

されば此時、池の面に一點の雲の淀みなく、空は  
淡く澄んで水か見え、いらかを迂り、廂を傳ひ、  
別荘の奥深く弱々とさし入る日は、晝の月の色を見  
るやう、掛花活の芙蓉の影を、てら／＼とある小机  
の面に宿して、朱の小さき硯が一個、一册觀世流の  
謠の本。生駒は身を反して、欄干に背を凭らせ腰か  
けた足を相違へながら、お婦美の容子を眺めたが、  
繼穂ないのを事とも思はず、座にひとありとも思は  
ぬ状で、

「おや／＼相變らず唸てます。．．．如何に  
頼光御心地は何とござ候ぞ」 と軍歌のやうに、一  
寸節を附けて言つて見たが、無邪氣に呵々と笑つて、

「何、そりや姉さん。」

「これですか、」

と衝と見返りざま、右手をしなやかに差出すと、  
手首にかけたは一聯の珊瑚の珠數、爾時搔卷の袖は、  
迂り脱けて、お納戸の紋着に、色こそ違へしどけな  
い桃色の扱き帯、姿も、ふりも、此處に．．．  
と思はず讚平は胸を抱いたが、フと恚る人と恚る境  
遇を天が戯にこしらへて見たのだと感じて、あはれ  
に思つた。

【完】